

## 輝ける民について

<p><b>花の少女第四巻</b></p> <p>花の少女と題される説話集の第四巻。 『ある村の若い男女の物語。争う二つの村人質として捉らえられた娘。 「サリーネ ここから逃げ出そう」「ヴェルジュ そんなことをしては貴方が……」。 月明かりだけが照らす中 手を取る二人の姿を 花の少女だけが見ていた……。』</p>	<p><b>影国奇譚 前巻</b></p> <p>ある者が記した 異国の地の放浪記。 『彼の民の痕跡は 様々な伝承として残されている。彼らは自らを輝ける民と呼び 独特の慣習を持っていたとされる。中でも特筆すべきは 彼らが神聖視していたとされる 十八冊の書物だろう。俗に魔導書とも 呼ばれる書物。その真相を調査すべく私は旅に出た。』</p>
<p><b>花の少女第十三巻</b></p> <p>花の少女と題される説話集の第十三巻。 『冬の森で病に伏す少女とその母。この冬を越えられぬと告げられた少女。寄り添う母。 「銀色の野原が見える……」「銀世界……。そこは恐怖も心配もない世界よ……」 消える白い霧。 泣き崩れる母の隣には花の少女だけが佇んでいた……。』</p>	<p><b>影国奇譚 後巻</b></p> <p>ある者が記した 異国の地の放浪記。 『旅先で出会った 大人びた少女は言う。「呪いで肉体は滅ばぬが 心の摩耗は避けられぬ」 彼女も 彼の民の調査をしているという。 「真実を取り戻さねば 呪いは解けぬ」 謎めいた言葉を残し 少女は 銀の文字を記した書を携え 再び旅路へ戻っていく。』</p>
<p><b>花の少女第十九巻</b></p> <p>花の少女と題される説話集の最終巻とされる巻。 『白き少女は 男に言った。「貴様が奪った 私の物語を 返してもらおう」 男は答えた。「我々の輝かしい未来のため 不必要な真実は書に挟まれた 押花となってもらおう」 かくして白き少女は消え 後には男だけが残った……。』</p>	<p><b>銀の文字のメモ書き</b></p> <p>古い紙に残された 走り書き。 『書は汝の花が生み出す銀の墨によりて 記される。墨は 花が汝より奪いし 色の結晶である。花が全ての墨を 喪いし時 汝の呪いは解かれよう。クギの花に 捧げられし少女よ。世界を旅し あまねく物語を集め 花の墨にて記すがよい。』</p>
<p><b>輝ける民の正典 第四篇</b></p> <p>輝ける民と呼ばれた 古の民の正典。その第四篇。 『囚われの娘を救い出すため ヴェルジュはその剣を天に捧げた。天をつく剣に いかずちが落ち 少年は輝ける力を手にした。 「ここから逃げ出そう」「そんなことをしては貴方が……。」 逃げ出す一組の男女。 輝ける始祖の物語。手を取る二人の姿を見る者は誰もいない……。』</p>	<p><b>アルトレジの冒険</b></p> <p>アルトレジと呼ばれる 冒険家を題材とした小説。 『アルトレジが遺跡を探索すると その再奥には一冊の書物があった。表紙に花があしらわれた その書物を開くと 乙女が現れこう言った。「偽りを糺す時がきた！」 乙女の左目には 花びらが咲いていた。』</p>
<p><b>輝ける民の正典 第十三篇</b></p> <p>輝ける民と呼ばれた 古の民の正典。その第十三篇。 『輝ける民は約定に従った。すると 白銀の世界が戸口をあけ 選ばれし者だけの園へと 彼女を招き入れた。冬の森で永遠に眠る少女は 銀世界のあるじとなり 一族の加護を約束した。娘を送り出した母は 晴れていく霞の中 ただ一人笑顔で佇んでいた……。』</p>	<p><b>ぼろぼろの魔導書</b></p> <p>サキの夢意識内で 手に入れた魔道書。包帯のようなカバーがかけられており、表紙が見えなくなっている。銀の文字で記述されているが ページの多くが白紙となっている。 「夜の唄を 奏でる魔物の伝承。若者が魔物の呪いを解くと 翼を持つ少女が現れた。少女は高らかに謳い 夜の帳をかき消した。そのか細い歌声を 若者だけが聞いていた……。」</p>
<p><b>約束の果実</b></p> <p>全てが謎に包まれた果実。 それは遠い遠い……誰かと誰かがたどり着いた たった一つの約束。</p>	<p><b>ツブラの玉</b></p> <p>優しく 温かい光を放つ 不思議な玉。ノポウ族が 奇妙な愛着執着を抱いて彼らの所持する 貴重な品々とツブラの玉とを交換してくれる。一説によると 時の彼方に眠る ある忘れられた女神の涙が結晶化したものだという。</p>

## 輝ける民について

<p><b>花嫁修行の心得</b></p> <p>修練用の巻藁に挟まっていた 四つ折りの小さな紙きれ。可愛らしい花の絵が 添えられている。</p> <p>『薙刀の道は これすなわち 乙女の道。殿方の心を貫くは 敵兵の心の臓を貫くに同じ。ゆえに花嫁修行とは 薙刀の素振りを極むることなり。朝も夕も 寝ても覚めても 一心不乱に 巻藁を打つべし。ただ打つべし。ひたすらに 打つべし。さすれば 意中の殿方は 汝に振り向かん。』</p>	<p><b>ふるびた温泉案内書</b></p> <p><b>【魂洗いの湯】</b></p> <p>こちらの温泉に ひとたび浸かれば あら不思議。体が すうっと軽くなり目の前に この世のものとは思えぬ 川が広がります。</p> <p>死に別れた女房に 体をじゃぶじゃぶ洗ってもらえば 魂まで まっさらに生まれ変わったような心地に なれるでしょう。</p> <p style="text-align: right;">～三代目 番頭～</p>
<p><b>月の青年 底本</b></p> <p>月の青年と題され 時代を超えて 複数の人物によって書き継がれた作品群。</p> <p>『ある夜 星の降る丘に 子どもが出かけていきました。そこには まんまる大きな穴と 青年がひとり おったとき。「あなたは 月から来たんだね！」けれども青年 答えずに ぼうっと お空を眺めてる。子どもは おうちに帰ったら お父さんに聞きました。「月には ひととは住めないさ。けれども うさぎはいるかもね』</p>	<p><b>月の青年 雨の海</b></p> <p>月の青年と題され 時代を超えて 複数の人物によって書き継がれた作品群。</p> <p>『「おいらは夢でも見てるのか？ 月も出てない夜なのに みなもに月が移ってら」「バカだな アレはクラゲだよ。まんまる太った キラクラゲ！」船乗りたちは大笑い。それぞれ 飽くまで笑ったら 持ち場に帰っていったとき。雨のそぼふる 夜半過ぎ。青年 ひらりと舞い降りて みなもの月を はがしてく。』</p>
<p><b>月の青年 雪の大陸</b></p> <p>月の青年と題され 時代を超えて 複数の人物によって書き継がれた作品群。</p> <p>『「やれやれアンタ正気かい？ こんな雪路を 裸足だなんて おっちょこちよいじゃすまないよ」青年 自分の足を見て そのあと 相手の足を見た。「それにしたって おかしいね。国じゅう雪なぞ 初めてだ。悪いことは言わんから すぐにおうちに帰りなよ」言って 小さな背中が去ると 青年 ふうっと息を吹く。雪雲 びゅんと消し飛んだ。』</p>	